Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

今月のこのコラムは、アメリカ西海岸を拠点とするジェリー・ホレンドルファー調教師をご紹介したい。2月7日現在で、北米の調教師として歴代第3位となる7221勝をマーク。2011年に競馬の殿堂入りも果たしている、北米競馬界の大御所である。御年70歳になるが、バリバリの現役で、最近で言えば昨年、8戦して4つのG1を含む7勝、唯一の敗戦がビホールダーにハナ負けしたG1BCディスタフだったというソングバードが、ホレンドルファー師の管理馬である。

オハイオ州アクロンの町外れに生まれたホレンドルファー師。現在では20万近い人口を抱えるアクロンだが、師が産まれた頃のアクロン近郊は、家にいたポニーを往来で乗り回せるほどの田舎町であったそうだ。アクロンの北側には当時、アスコットパークという競馬場があり、そこで見た競馬に魅せられたホレンドルファー師は、アクロン大学で経営管理やマーケティングを学んだ後に、競馬の世界に飛び込みホットウォーカーの職を得たというから、かなりの変わり種である。厩務員、アシスタントと一歩ずつ階段を上った後、北カリフォルニアを拠点に自ら開業したのが、33歳となった1979年のことだった。

開業当初は勝てずに苦労したが、1986年にベイメドウズとゴールデンゲートで開催リーディングを獲得し、年間勝利数が初めて100勝を突破。1988年にキンググロリアスでG3ハリウッドプレヴューSを制し重賞初制覇。同じ年の暮れ、同じくキンググロリアスでG1ハリウッドフューチュリティを制してG1初制覇を果たし、トップリーグの仲間入りをしている。

以降、北米競馬の最前線を走り続けてきたわけだが、その実績には際立った特徴がある。

ここまで(2月7日現在)積み重ねてきたG1勝利は38を数えるが、このうち3分の2にあたる25のG1を、ホレンドルファー師は牝馬で挙げているのである。2度以上制しているG1競走が7つある中、08年にヒートシーカーで、15年にシェアドビリーフで制したG1サンタアニタHを除く6つのG1が、牝馬限定戦だ。牡馬3冠戦における勝利は1度もない一方で、G1ケンタッキーオークスは3勝(91年のライトライト、96年のパイクプレイスダンサー、10年のブラインドラック)。大陸を横断して出走させる東海岸の牝馬限定戦も、G1CCAオークスが2勝(91年のライトライト、16年のソングバード)、G1アラバマSも2勝(10年のブラインドラック、16年のソングバード)しているのである。

すなわち、牝馬の扱いが非常にうまい、女心を読むのに長けた調教師が、ジェリー・ホレンドルファーなのだ。

そのホレンドルファー厩舎に今年の春、また1頭、ユニークベラ(父タピット)という楽しみな3歳牝馬が現れている。G1BCレディースクラシック(d9F)を含むG1・2勝馬アンライバルドベルの2番仔という超良血馬のユニークベラは、昨年11月にデルマーのメイドン(d6.5F)を10.1/4馬身差で制し、デビュー2戦目で初勝利を挙げると、続いて出走したサンタアニタのG2サンタイネスS(d7F)を7.1/2馬身差で制して重賞初制覇。そして、2月5日に同じくサンタアニタで行われたG2ラスヴァージネスS(d8F)も、ほとんど馬なりのまま8.3/4馬身差で圧勝。G1ケンタッキーオークス戦線の有力馬に浮上したのである。

一方、今季も現役に留まった、昨年の最優秀3歳牝馬ソングバード(牝4、父メダグリアドロー)は、1月23日に放牧先から帰厩。ホレンドルファー師は「目標は決めずに、ゆっくりと調整する」と語っているが、馬主サイドからは、3月18日にサンタアニタで行われるG1サンタマルガリータS(d9F)あたりから始動という声が聞こえてきている。

ソングバードとユニークベラの2枚看板で、G1戦線を大いに賑わすであろうジェリー・ホレンドルファー調教師から、目の離せない1年となりそうである。